

●高澤良一 第八句集 随笑

●四月―六月

蠅日に日にちからをつけぬその羽音

ごり押しの手亀の子岩に乗る

蛤江ノ嶋に舌も納得島遊山

干菓子に型俳句にも型目借時

ひと雨を齎す蛙の手柄顔

岩登りかけてその儘日永亀

囀りの歌姫にしてラテン系

ほんたうの処濁して椿餅

鯉群れて撒餌とり合ふ仏生会

志ん生の呂律恐ろし玉子酒

銭湯の熱くて痒し桜どき

春宵の胸撫でおろすやうな灯よ

桜草植う家いやに殖えにけり

鳥帰る電気自動車走る世も

だっこしてまたおんぶして花の山

彼の若木よくぞここまで初桜

日永亀干割れ危ぶむその甲羅

野毛の桜昭和の戦見て来しと

花冷え動物園のコンドル無垢の襟巻す

横目にて像は吹雪ける花を見ぬ

花照る中チンパンジーは何誇示す

水中の蝌蚪の紐揺り止まぬ風

花どきの鶉かぶらなのうわまえはね雀

むま禅画展さうなかぶらな燕かぶらなに似て円相圖

燕の禅画禅味の風吹かす

日永なる仙崖の猫いや虎圖

達磨圖にべたと花冷え花押かな

天界へ跳んで白隠雪嶽描く

白隠の書画踏み破る花ごころ  
南天棒讚この棒に怖るゝものは極樂行

黒凍みの南天棒の南天棒

外人墓地クルス十字架の間を落花抜け

不景気をぼやいてみても紫荊

この先も斯うした花の日和あれ

山中に達者なりけり大桜

上枝より落花飛脚の発つごとし

あとは散るばかりの花にふふむ酒

むさき身を花の押照る中に入れ

花蕙抱え挨拶交しをり

花の間鴨千鳥ヶ淵広がりにて

濠柳芽吹く向うに新聞社

山巻金沢八景 野島山いて有象無象の雑木の芽

落花受く地べた凹凸ありにけり

接骨木のこちらに少し増しな花

オオヘビガイ出土貝塚飛花よぎり

退屈でぺんぺん草の撥こづく

似通った彩して芽吹くみな雑木

花屑の糝めき合へる轍あり

花の間を何処まで飛翔長き鳥

花屑の中のひとひら返す風

花畳なはり大観の朦朧体

先手取るごとく咲き出すこの桜

花吹雪次の一ト吹き待ちある眼

花吹雪そびらに駈け出したくなりぬ

花吹雪く度に両掌をひらく人

立ちつくしそのまま浴びぬ花吹雪

かんばせに受けて花吹き余る風

花房へすうつと鳥の首が伸び

花つきのよき木とあふぐ二人連れ

桜誉むこゑもいろいろ女衆  
朝夕の殊に夕べの花の相  
奢るとはめっそうもなき家桜  
花眩しむ人を眩しみ通りたり  
あかがねの亀とおもへば首動く  
間近に來目許くりくり花の鳥  
紫荊不景氣づらをする勿れ  
あまたるう空暮れゆけり仏生会  
花吹雪人の話の腰折りて  
忌寿福寺に参ず虚子一門の靴の数  
虚子の忌の杖を持ち換へ立話  
隆として柏槨老樹虚子忌かな  
仕出し物届きて虚子忌の旦那寺  
花御堂ぐるぐる廻りに近所の子  
掌を合はす誕生仏に喜捨の音  
甘茶懸く女の肱のすつと伸び  
花御堂守は檀家の古老にて  
浴仏に妙なるものを降り注ぐ  
杖を突く音のぱったり飛花あふぐ  
諸葛菜蒙忍性墓古退かせし僧の墓  
花は花楸は楸にて押し通す  
大仏を割愛したる花疲れ  
水仙光則寺を四柱に束ね花御堂  
空青う青うなりゆく仏生会  
海棠に負けぬ笑顔を撮りなされ  
花御堂参りの男女なんによふと途切れ  
判らぬはこの手の花よ花貝母  
女共とやかに云へる花貝母  
石畳飛花着地して石のいろ  
吹雪くたびこれはこれはの山ざくら

夕雀花屑蹴つて発ちにけり  
君其処へ牡丹の脇へ吾撮らん  
真昼間の人気疎げな牡丹かな  
桜餅芳香うれしき限りかな  
ぼうたんを揉みに揉む風打合へり  
辯へたと牡丹に疲れ見えにけり  
花あほる風千変す紅牡丹  
牡丹吹き通りすがりの巫女を吹き  
うらうらと雉子歩まんか汝の忌日  
三浦勲氏一周忌 富士岳麓 本門寺  
裾野駆く雉子に夫あり妻子あり  
三浦夫妻同墳にねむれば  
宴闌けて花びらいろの貫主さま  
漉油採りにそろそろ春の山  
こしあぶら  
燕くる畑毛温泉湯はぬるめ  
田蛙聞きうたたね心地畑毛の温泉  
ゆ  
田蛙のかいかい雲から貌出す富士  
はるじよおん富士も薄紅帯びて聳つ  
午報告ぐ酸葉に雀の鉄砲に  
春霞富士はうたたね決め込めり  
田雲雀の揚りどうしに喉乾く  
見そめたるごとくげんげの辺に跼む  
指匠師の家の蘇枋の花盛り  
乙鳥飛び海道筋の大社  
三嶋大社  
花は葉に東鑑にのる社  
桜藥降らすや三嶋大明神  
甲羅干す亀見て日永いや気長  
八重桜大社を巫女の行き交へる  
八重桜險重たくなりにけり  
東海道三嶋の宿のうなぎ食ぶ  
しゆく  
鰻繁の黄のおしぼりの囀りさう  
湧水にミシマバイカモ波打てり  
柿田川

木々芽吹きトビケラも羽化忙しき  
羽化一番乗りのとんぼと出合ひけり  
湧水見てサナエトンボに出会う径  
云うてみてトウカイトンボ。ポ。ポ佳き名なり  
柿田川根芹に直にあたる水  
春光を芹に振り撒きゆける水  
馥郁ともくれんの芽のかぶり物  
筍たかなを例えて云へば男気歟  
潮に先づ足を浸して浅蜷掘  
取り外しきく蜥蜴の尾置いてゆく  
母の日のおかあさんてばおかあさん  
水面這ふ虫に田螺の大雁塔  
つつじ武山 三浦富士に虻あぶ体あづけ蜜吸へり  
山道に毛虫の落ちて忙しき  
飛んでくる虻真つ黒け二輪草  
木洩れ日に群れを恃める宝鐸草  
楠鎌倉若葉むんむん御成小学校  
覚えたてのくさばなにして草の王  
夏座魚佐次 (割烹)敷茶のうまければおかはりす  
デッサン源平池の浮葉浮葉の間合ひかな  
宮鳩の若葉曇りのでっぼう  
劉生岸田劉生展の習作春の坂の草  
劉生の道の画ばかり夏近し  
葉桜を猶猶蒼く風吹けり  
無為の日々葉ざくらを風養へり  
大き蠅旧浜離宮庭園牡丹臭さを帯びて発つ  
さしかかるぼうたんの名は陽明門  
ぼうたんに疎んぜられて発つ蠅か  
たんぽぽの絮の一つを壊しみる  
鈴蘭に横より突き出すむさき顔

かたばみを捨てて電話に出でにけり  
職退いて一年経つか桐の花  
港区の街路樹ドッグウッドなり  
卒業期の渾名キューピーてふ先生  
蒨草妻奨めればそると箸  
栄螺の蓋裏返しみてひとり酒  
栄螺の蓋卸によからむなどと酔ひ  
壺焼やリストラの風吹ける世の  
天皇賞走破の馬体湯気揚げて  
祭見港祭りの立ちん横濱国際仮装行列ぼ疲れ馬車道に  
白服に浜の豆ツ子鼓笛隊  
横濱にズンタカタツタ祭くる  
パレード率て皐月のハーレイダビイドソン  
税関のグラス五月の空展け  
黄金週間職退いててふ語嘗ての響きなし  
新茶淹る湯加減のこと添え文に  
藪北の新茶新茶と云ひ注げる  
擂粉木の音のづるづる若葉冷え  
子供の日近し葉っぱのフレイディ読む  
まてば椎若葉もりもり小公園  
愚図ついていつになったら五月晴れ  
御不浄と云ふ語遺れり著莪の花  
毛虫つく頃の柾と見てとほる  
連休の若葉曇りの初日かな  
連休の中日の毛虫退治かな  
若葉風若葉雨とが入り乱れ  
燕来と先に云はれてしまひけり  
ぼうたんを見限りて風荒吹ける  
俳諧観音崎のよしみの酒をそら豆に  
装観音崎ひも定九郎めくあめふらし

海牛のモウモウ歩きしたりけり  
海牛をおいてけぼりに忘れ潮  
蟻地獄石ころ一つ振舞はん  
かがんぼ斯様に物に掴まり躰寄す  
あぢさゐの彩の違ひを見てゆかん  
花蘇鉄黒船の世は嘸やさぞ  
真鶴の魚付林の総若葉  
南風に奏づは弁天様にまします歟  
佳き風を振舞はれけり夏座敷  
吹かれゐる夏の櫂の鉄火肌  
木より落つ毛虫地べたを一目散  
すつとした顔になりたる心太  
読み切るとひとり気負へば青嵐  
家ぬちに風を通して葛ざくら  
海を揺り山を揺り立て大南風  
天が下菖蒲の剣葉折葉かな  
杜若空には雲の覆ひ物  
黒毛虫妻譏ること譏ること  
岩に手を掛けて退ければきよとんと蟹  
色と云ひ隣家の薔薇に遜色なし  
叩かれて雨にくたんとなる浅沙  
毛虫垂る糸の辺りを横払ひ  
この池を目当てに現るゝ青大将  
判じ物めくなり蜷のけふの道  
神木を遊び場にして鴉の子  
蜷の道筋書き見えぬコントに似  
度忘れの頭叩いて丈山忌  
黒揚羽一息入るゝ大樹の根  
すべてこれ泰山木より落つ木の葉  
ユスリ蚊のお祭り騒ぎ生まれり

紋白蝶とおじやましている引き売女  
螢見に行かんと軽く腹拵え  
螢出る迄の四方山話かな  
ホタルの句書き取る手許如何にせん  
一匹は上ずるやうに飛ぶ螢  
ほうたるのモールス信号打つごとし  
海はもう手ぐすね引いてごめの声  
手放しに海が招くよ海紅豆  
伸びをする雀の居りて梅雨晴間  
稔下田稔 田中灯京 泉下にてほたる灯京ほたる連れ立ちて  
目次に目あそばせ梅雨の日の読書  
金亀虫さうかさやうか灯を遣ろふ  
ぶつかるは糠蚊のたぐひ払ひけり  
遠雷は陰口に似て崎つ方  
棒切れでかまえば蠓螂ご立腹  
枉垣うどんこ病のなすがまゝ  
蚊ばしらの柱を何處へ持ってゆく  
つつかけで出て庭先の蟻を見ん  
羅を着こなし上手水海月  
ざくろ散る凶事相次ぐ世となりて  
紙を切る音のそりそり梅雨一間  
あぢさゐののっぺらばうに雨ざんざ  
紙魚を詠むこころ世過ぎの足しにせん  
老鶯の間髪入れず玉のこゑ  
御威光の具足をみする大百足  
著莪叢の凄みを増せる不動脇  
でで虫の角のほとりへ寝ぼけ貌  
禿めくうひうひしさも合歡の花  
そよ風の何ほのめかす合歡の花  
にんだうの花の自墮落雨の底

泰山木高みに咲いて月に逢ふ

亀虫の匂ひ持ち込む梅雨の家

あぢさゐが飛ぶ飛ぶ回メリーゴ転木馬ランド

なめくぢの請願届き雨三日

甲斐甲斐しく若葉日を撥ね馬刀葉椎

でで虫の大いなる伸び朝あさほらけ朗

存分に泰山木の雫切る

拍子木横浜 自然観察の森が鳴りてほうたる舞ひ始む

なまなまと葉を透き歩く草螢

大螢降下わくわくする子らへ

ほうたるのサマリヤ人といふところ

竹林螢の宿はこの奥に

ほうたるの今日の興行終りけり

螢臭き掌をおし広げ見せにけり

汗をかき日々を勇んでああ昭和懐旧 二句

走馬燈僕の時代が遠くなる

梅雨入の湯舟にでんでんむしの唄

けふからの夏を向ふに廻したり

雀蛤と化せる次第をつゆ知らず

ほつりんと剃り残されし梅雨の髯

さくらんぼ甲乙丙の丙の味

振花よつたりの翩翩梅雨の中休み

四人で聞いて確かに夏の虫

まだ鳴かぬ蟬のどうしていることやら

南仏料理卓に一輪挿しガーベラ